令和5年度大学における文化芸術推進事業採択一覧

【 単位：千円 】

	大学名	事業名	事業概要	内示額
1	学校法人　早稲田大学	舞台公演記録のアーカイブ化のためのモデル形成事業	【概要】 　舞台公演記録および関連資料をアーカイブするための各種処理をこなし、将来的に収益力に結び付けることのできる人材育成のために、令和4年度の外部評価者による評価を参考に、連続講座を設計する。令和4年度の講座を「基礎編」、今年度を「実践編」とし、より専門的で実践的な内容に特化した講座開設を目指す。ワークを用いながら行う資料の保存についての全10回の講座を実施後、アーカイブの活用へと視野を広げ、考えを深める2回のワークショップを実施する。これらの成果をハンドブックにまとめ、令和5年度版「ドーナツ・ブック」を作成する。また、令和4年度において補助教材とするため翻訳した、アメリカの舞台芸術アーカイブの手引書「PRESERVING THEATRICAL LEGACY」を参考に、有識者と共に日本版アーカイビングマニュアルを作成する。このアーカイビングマニュアルは、海外とは様々な事情が異なる、我が国独自の舞台芸術業界に寄り添った内容として作成し、広く一般に公開する。そうすることによって、専門のマニュアルがこれまで存在しなかった舞台芸術業界において、アーカイブ化への意識をより高めるとともに、実際のアーカイブ活動を促進する効果が期待できる。これらの事業を実施することによって、育成対象者がより実践的な知識や技術を身に着けるだけでなく、講座終了後もハンドブックやアーカイビングマニュアルを参考に継続的にアーカイブの実践に取り組むことができるようにし、本事業の成果を公共の知的財産として広く共有し、舞台芸術および舞台芸術アーカイブの一般の人々への周知にも寄与する。 【対象】 　演劇・舞踊・伝統芸能等の舞台芸術の劇団や劇場、スタッフ・創作者、文化施設やアーカイブ機関、自治体の実務者を主たる対象とするが、大学で演劇や映像、アートマネジメントを学ぶ／学んだ学生、研究者など舞台芸術アーカイブに興味を持つすべての人に門戸を開く。継続的な人材育成のため、対象者は令和4年度講座の内容を理解していることを前提とし、令和4年度講座の未受講者には事前に令和4年度のアーカイブ動画を提供し、自主学習を促すことでキャッチアップをはかる。	12,500
2	国立大学法人　北海道大学	ミュージアムにおける異分野との「対話」と「寄り添い」を通じた人材育成事業	【概要】 　本事業の1年目では「ミュージアムをめぐる対話（ANALYIS）」と題して、各領域・組織の専門家を招きミュージアムを取り巻く社会的現状と課題について育成対象者とともに考えてきた。 　2年目では「ケーススタディを通じた寄り添い（INSIGHT）」と題して、1年目より少人数で深く学ぶ実践形式のケーススタディを通じて様々な領域の知見に寄り添いながら、地域社会が直面する課題にミュージアムならではの観点を用いて、実践・自走につなげるための支援を提供し、今後の協働に向けた知識とスキルを身につけていく。具体的には、各分野におけるケーススタディの蓄積と活用の現状をテーマにキックオフシンポジウム（活動①）を開催する。引き続き、現在特にミュージアムに求められている「観光」、「記録と記憶」、「社会包摂・文化多様性」（活動②～④）を取り上げ、セミナー形式、現地での見学やワークショップなどの実践的活動を含めたケーススタディを展開していく。さらに、活動②では、北海道大学総合博物館を実践フィールドに今後可能な観光支援の形を構築し、試行する。併せて、このケースにおいて事業内容の改善と持続可能な運営を目指すために事前から事後の各段階において評価を実施する。各育成対象者が活動②～④での活動成果を発表する報告会（活動⑤）を開催する。 　最後にクロージングシンポジウム（活動⑥）では、北海道内各地のミュージアムを対象に、地域課題解決や地域経済の促進につながる取組みに関するインタビュー・シリーズを実施した成果をまとめ、北海道の事例を中心に、全国ミュージアムの動向や現状に照らし合わせて考えていく。 【対象】 ・社会教育系専門職（ミュージアム学芸員を中心に、司書、アーカイヴィストなど） ・文化施設系専門職（ホール・劇場の担当者、制作者、プロデューサーなど） ・自治体職員（文化政策、文化施設、観光政策の担当者など） ・NPO職員（公共文化施設の指定管理者、業務受注組織のスタッフなど）	14,500
3	国立大学法人　佐賀大学	佐賀モバイル・アカデミー・オブ・アート～オーラルコミュニケーションを核としたアートマネジメント人材育成	【概要】 　活動① アートを学ぶ：音声メディアを活用した美術教育プログラムの検討・開発・試行 高校6校の美術教育関係者（教員・生徒）にヒアリング＆ディスカッションおよび試行的実践（表現・鑑賞）を重ねながら、令和6年度の教育プログラムに向けての教材開発に取り組む。 　活動② アートを伝える：わかばリポーターによる音声コンテンツ作り 「話し言葉」でアート情報を伝える人材を育成する連続講座（7回）を行う。メディア研究者とラジオディレクターによる指導・助言を受けながら、受講生8組が各自で音声コンテンツを作成。その成果は実際の電波（CROSS FM）で放送＆アーカイブ配信。 　活動③ アートを届ける：耳で聴くアート準備室 ③-1.ゲスト講師によるオンラインレクチャー 計7回…令和6年度「耳で聴くアート」展企画の参考のために、ゲスト講師から過去の活動事例や今後のアイディアについて聞く。レクチャー音声のみアーカイブ配信。 ③-2.わかばキュレーターによる企画会議 計6回…ラジオディレクターによる監修のもと、受講生6組が「耳で聴くアート」展キュレーションの可能性をめぐるディスカッションおよび試行コンテンツ作成に取り組む。その成果は実際の電波（LOVE FM）で放送およびアーカイブ配信。 【対象】 　活動①高校美術教員・高校生、SMAART過年度受講生　活動②ライター、リポーター、ナビゲーター、パーソナリティ、ディレクター、音声コンテンツ（ラジオ、ポッドキャスト、ライブ配信等）企画制作、マスメディア関係者、批評家志望の学生・社会人等　活動③-1：文化芸術に関心ある方全般　活動③-2：音声メディアによる美術展のキュレーションに関心ある学生・社会人、企業の広報・コミュニケーション事業担当	8,700

令和5年度大学における文化芸術推進事業採択一覧

【 単位：千円 】

	大学名	事業名	事業概要	内示額
4	学校法人　東京音楽大学	伝承を担うフィールドからまなび、ともにつくり、地域へつなぐアートマネジメント人材育成－伝統音楽・芸能の地域レガシーによる新たな価値創出を目指して－	【概要】 ■Ⅱ「フィールドとともにつくる」をテーマとする。「フィールドとともにつくる」にあたり、令和５年度の活動で想定する「フィールド」は、前年度（令和4年度）と同じくa)伝統音楽・芸能を伝承する個人・組織やそれを支える地域コミュニティを含む「伝承を担い未来につなげるフィールド（伝承を担うフィールド）」と、新たに　b)文化芸術基本法にも有機的な連携が図られるべきと明示されている福祉や教育、多文化共生等の「連携し多様な実践を展開するフィールド（実践を展開するフィールド）」の二つを想定している。伝統音楽・芸能に係るアートマネジメント人材育成には、これら２つのフィールドを知り、両者を繋いでいく役割が求められる。 ■以上の課題意識から、伝統音楽・芸能の伝承をめぐる課題、および社会や地域が抱える課題に対応できる企画制作プログラムを開発するために２つのフィールドを柱に置き、①基礎講座では、「伝承を担うフィールドとともにつくるための基礎講座」「実践を展開するフィールドとともにつくるための基礎講座」を、各分野の専門家の協力を得て、多角的に学べる講座を展開する。②実践セミナーにおいて、受講者は③で対象となる伝統音楽・芸能のすべてを体験することでそれぞれの特質を学ぶとともに、ワークショップ等のノウハウも学ぶ。③企画制作研修では、前年度（令和4年度）にすでに実践セミナーでフィールドワークを実施している４つの伝統音楽・芸能団体、コミュニティを「伝承を担うフィールド」とし、それぞれに対し異なる関連分野及び連携する具体的な実践先を「実践を展開するフィールド」として４つのプロジェクトを用意する。受講生は申し込み時に４つのプロジェクトから１つを選択し、「伝承を担うフィールド」と「実践を展開するフィールド」の両方のフィールドワークを経て、それぞれのフィールドの関係者の協力を得ながら、企画立案・企画の実践をする。 ■得られた成果をとりまとめ、報告会において発信するとともに、過年度事業で構築したプラットフォーム（TCM-JAM）において発信し、交流の場を展開する。 【対象】 政府・自治体等の各担当者（芸術文化企画・文化財保護・国際交流・地域振興・学校教育・生涯学習・福祉）、文化施設関係者、伝統音楽・伝統芸能団体関係者、学校教育関係者、演奏者・演奏団体関係者、アートマネジメントに従事している者又は志す者、当該地域の音楽・芸能を生かした地域創生等に関心がある一般居住者等	13,500
5	国立大学法人　北海道教育大学	プロジェクト JOMON ―北海道・北東北の縄文文化をテーマとしたアートマネジメント人材養成プログラム―	【概要】 令和４年度に地域間交流の軸とした「青森」に加え、「秋田」「イギリス」へ事業を拡げて展開する。 ①フィールドワーク 大湯環状列石をはじめとした秋田県北東部の遺跡群を訪問調査する。また、「北海道・北東北の縄文遺跡群」の出土品を展示しているストーンヘンジ（イギリス）を現地取材・調査することで、グローバルな観点から縄文文化を捉える。 ②セミナーの開催 専門家（考古学、民俗学、アート、メディア等）を講師に迎えたレクチャー及びフィールドワークにより、理論面を学ぶとともに歴史を体験することで、縄文文化を現代社会の手法によりマネジメントする能力を養う。 ③ワークショップ 令和４年度に引き続き、廃校を縄文文化の発信拠点として活用している室蘭市の旧絵鞆小学校を軸にしたワークショップ。令和５年度は「映像ワークショップ」と「ファミリーワークショップ」の二種類を実施する。 ④展覧会の開催 レクチャー及びフィールドワークで学んだノウハウをもとに、実践を行う。 ⑤活動報告ホームページの企画 令和４年度に引き続き、本事業の講師、受講生などによるセミナーレポート、関係者へのインタビューや動画などをWEB上のホームページに集積し、今後のプロジェクトにおける教科書として活用する。 【対象】 北海道内の芸術家・芸術団体の関係者、政府・自治体・企業の芸術文化広報・企画担当者、企業の企画担当者、マスメディア、インターネットメディア関係者、一般市民等の既にアートマネジメントに従事している者及びアートマネジメントを志す者、学生など。	11,200
6	国立大学法人奈良国立大学機構　奈良女子大学	クロスリアリティ時代に求められる「リアル」「バーチャル」往還型アートコミュニケーション人材育成事業	【概要】 １．【講座プログラム】 1回2h×5回の連続講座を行う。これにより、メディアアートやデジタルアートの現状等の理解、肖像権・著作権等への対応、進化するアートキュレーションの方法論等を学び、デジタル技術を基盤とした芸術表現、文化資源の保存と活用に関する知識を身に付ける。２．【ワークショップ】 ２つのワークショップを開催する。第１が、デジタル技術による作品の保存修復に関するワークショップ（データ収集・保存、色補正の自動化等を体験）であり、第２が、デジタル技術を用いた創作ワークショップ（写真を画像生成ＡＩや動画生成ＡＩで加工）である。２つとも、奈良市写真美術館が所蔵する入江泰吉の作品を用いる。同美術館は、入江作品の著作権も保有しており、入江作品を加工して新たな作品に生まれ変わらせる創作体験が提供できる。これにより、研修受講者に文化芸術に関する感性・言語能力を修得させ、コミュニケーションがとれるようになることを目指す。３．【アーティスト･イン･レジデンス】 新進のアーティストを招へいし、奈良の地で作品制作をさせ、展覧会を開催する。当該アーティストは、上記１と２にも講師として参加し、研修受講者とのコミュニケーションの機会を通じて、自身の作品を客観視する視座を獲得し表現力向上につなげる。また、研修受講生や地域・企業の者が、実際のアーティストによるアート制作の様子を目の当たりにする機会を提供することで、文化芸術の創造活動への興味関心を高めることも目指す。４．【展覧会】 上記１と２で修得した知識能力を実際に発揮する場として、また、上記３の成果発表の場として、奈良市写真美術館とメタバースNFT奈良市写真美術館を活用した２つの展覧会を企画運営する機会を設ける。研修受講者等が、リアルとバーチャル双方の展覧会を体験することで、将来求められる総合的なアートマネジメントスキルを修得する。 【対象】 奈良女子大学・奈良教育大学学生、奈良県内自治体・美術館・文化施設等職員、現役アーティスト、等	11,400

令和5年度大学における文化芸術推進事業採択一覧

【 単位：千円 】

	大学名	事業名	事業概要	内示額
7	国立大学法人　大阪大学	中之島に鼬を放つⅡ―大学博物館と共創するアート人材育成プログラム	【概要】 　本事業は大阪大学大学院人文学研究科と大阪大学総合学術博物館、大阪大学中之島芸術センターが共同主催する3年計画の事業である。アートマネジメント関連職種や芸術系諸機関での就職を希望する人や既に就職している人を中心に募集し、受講者を15名程度とする。本事業では、本プログラムの拠点となる予定の大阪大学中之島センター近隣の芸術諸機関、大学近隣の地域社会、また広くアジアやヨーロッパなどから、アーティストと一般市民が集い、多様な生を実現していくためのアート人材を育成する。プログラムには統括セッション（全体を統括するオープニング・セミナー、レクチャー・シリーズ、クロージング・シンポジウム）と4つのリサーチ・フレーム（「場所のナラティブ」「アートとその分身」「臨床のアート」「日常のポイエティーク」）とを設定する。フレームの中には、レクチャー、リサーチ、ワークショップ、クリエーション等のステップを組み込み、基礎から応用、成果公表まで配置してアート・プログラムを推進する。これら5つの活動（4つのリサーチ・フレームと統括セッション）に、3単元ずつを割り当て、15単元を履修しかつ最終レポートを提出した受講生には修了証を交付する。近隣の芸術関連諸機関からアドバイザーとして協力を受ける。事務局に特任の職員１名を置く。 【対象】 　劇場、音楽堂、美術館、博物館など各種文化芸術関連機関で、アートマネジメント関係の仕事に従事している人や今後それらの職種で働きたいと考えている社会人。文化芸術を通じて地域社会に貢献したいと考えている社会人。アートを学ぶ学生の受講も歓迎する。	12,600
8	学校法人東成学園　昭和音楽大学	「実演舞台芸術の新たなビジネスモデルを構築する」～ポスト・コロナ時代のためのアートマネジメント人材育成	【概要】 　事業2年目となる令和5(2023)年度は、コロナ禍での実演舞台芸術の市場動向や、加速する舞台技術のイノベーションの最新情報を学び、実演分野での国際共同のあり方や、聴衆拡大に結びつく新たなビジネスモデルを展望する。 　事例研究として、舞台稽古などオペラ演出の重要な過程でオンラインを導入し、それを受講生自身に見学させることを通じて、制作人材の育成に役立てる。 　また30年近く刊行実績のある『日本のオペラ年鑑』の編纂を、当該年度から本事業の一環として実施し、我が国オペラ制作の基礎資料を提供すると共に、広く実演舞台芸術の人材育成に寄与する。 【対象】 　劇場、音楽堂などの文化施設、自治体、文化財団などの芸術文化担当者、実演団体、音楽事務所などの職員などの現職スタッフ、およびその担い手を志望する人、アートマネジメント専攻の学生・卒業生など、今後アートマネジメント分野での活動を志望する人。	20,000
9	学校法人　京都精華大学	マイノリティの権利、特にSOGIをはじめとした〈性の多様性〉に関する知識と、それらを踏まえた表現倫理のリテラシーを備えたアートマネジメント人材育成プログラム	【概要】 　※【レクチャーシリーズ】【対話のワークショップ】【マネジメント実践プログラム】を実施する。展覧会／上映パフォーマンスと同時に実施することで、本事業の教育効果と波及効果を高める。 ※【アーカイブ】では、過去2年間に実施したレクチャーシリーズやゼミで制作したメディアコンテンツの動画、ネットワーク構築の成果であるレポート記事などの集積を、専用ホームページで公開し、3年間の本事業の成果物とする。 ▼下記のプログラムの総称を、「あなたの隣を歩く人がいる」として、2023年度を通じて実施する。 【レクチャーシリーズ】令和3、4年度に実施してきたレクチャーシリーズの続編とし、先端的なマイノリティ論を体系的に学ぶことを主眼とする。また、初年度よりゼミで紹介してきたアート作品（ナオミ・リンコン・ガヤルド『ホルムアルデヒド・トリップ』）を題材とし、作品の背景となっている概念・思想のうちグローバル・サウス」、「インターセクショナリティ」、「クィア」に学びのテーマを絞り、芸術実践者向けのレクチャーを実施する。 【対話ワークショップ】【レクチャーシリーズ】で学んだ知識を「対話」を通じて深めるワークショップを実施する。各ワークショップのテーマについて、受講生が自身で思考し、他者と対話するトレーニングとする。 【マネジメント実践プログラム】『ホルムアルデヒド・トリップ』の日本初展示と上映パフォーマンスを行う。レクチャーシリーズと対話ワークショップで得た学びを踏まえて作品への理解を深めるとともに、受講生が鑑賞者向けツールや教育普及プログラムを企画・立案する。 【アーカイブ】2022年度に開設した専用ホームページで、初年度から開講してきたレクチャー動画や、ゼミで受講者と制作した動画などのオリジナルコンテンツを公開する。本事業を一過性の学びにしないために、レクチャーシリーズの動画アーカイブは、事業終了後も公開する。 【対象】 　アートプロデュースやアートマネジメントの実務者、学芸員、アーティスト、芸術系メディア（書籍、ウェブメディア等）の編集者、大学教員をはじめとした研究者、行政の文化政策担当者、これからアートプロデュースやアートマネジメントの現場で働こうと考えている者	12,700
10	国立大学法人東京藝術大学（国際芸術創造研究科）	「すみだ川アートラウンド」～ARTs×SDGsでつながる隅田川流域の民間組織コレクティブ化構想	【概要】 　令和5年度の事業では下記の4つの活動を実施する。 (1) すみだ川アートラウンド・ラウンドテーブル さまざまな分野での、ARTs×SDGsをテーマにした領域横断的な取り組みを実現するための議論と事業の実施。 (2) すみだ川アートラウンド・プラクティス 隅田川流域7区内のアートNPOのコレクティブ化構想の実現を目指す。 (3) すみだ川アートラウンド・ハブ 隅田川流域で活動する官/民の交流の場を設ける。 (4)すみだ川アートラウンド・キックオフミーティング 上記(1)～(3)の活動を実施するメンバーが参加し、相互の活動報告・情報共有・活動の周知を行うことで事業の活性化につなげる。 【対象】 　アートNPO関係者、アーティスト、企業や行政(外郭団体を含む)の職員、大学生や文化ボランティア経験者、市民等	9,700

令和5年度大学における文化芸術推進事業採択一覧

【 単位：千円 】

	大学名	事業名	事業概要	内示額
11	公立大学法人 京都市立芸術大学	共生と分有のトポス～芸術と社会の交差領域におけるメディエーター育成事業	【概要】 令和5年の10月に京都市立芸術大学は京都駅東部の崇仁地域へ全面移転する。被差別の歴史を有するこの地域への大学移転は、行政、大学、地域住民の間での長期にわたる折衝を経て実現したものであり、芸術が有する独自性を深化させつつ、まちづくり構想にも開かれた役割をも担う。本事業では、地域・大学・芸術の関係について積み重ねられてきた調停から現れる「共通の属性」と「相容れない属性」、この複雑な関係について思考を重ねる。この目的のため以下の３つの活動を軸に進める。【テーマ　環境：活動-１　聞くこと～暮らしの生態系】フィールドワークやモノを介した対話をモデルとして「暮らしの生態系」から聞く技術、【テーマ　ケア：活動-2　物語ること～アルバムに貼られていないスナップショット】言葉・イメージ・身体を介して経験を再構築し伝える技術、【テーマ　公共空間：活動-3　状況の再構築～崇仁でゴドーを待ちながら】活動-3は、活動-1と活動-2でのリサーチを基盤に、取り壊された住宅の痕跡が残る空き地に仮説的な舞台を設営する。ここでの準備―設営―展示公演―解体―移動―記録というプロセス自体が古い課題を新しい視点から見るための地域との協働的な集団制作行為となる。本事業は受講生と共にどのように代替的な公共的手段を見つけることができるかという疑問から出発し、社会領域と共に芸術と教育それ自体にも対峙する二重の繊細な地平線を進行しつつ進められる。 【対象】 アートマネジメントを目指す大学院生や社会人、行政の文化政策やまちづくり担当者、社会との関わりに意欲をもつアーティスト、開かれた美術館のあり方を模索する学芸員、創造性を活用した教育を目指す教員や教育学部の大学院生、コミュニティーアーカイブの作成を目指す市民	12,800
12	学校法人中村産業学園　九州産業大学	「2042年問題」解決に向けた社会資源を活用した「健康寿命」増進プログラム開発とリンクワーカー人材育成事業	【概要】 1.博物館を活用した「健康寿命」増進プログラム開発講座（博物館などの社会資源を活用した、回想法、園芸療法、音楽療法などの「健康寿命」プログラムの体験、そして企画立案・実施運営の方法を学ぶ講座） 2.博物館リンクワーカー人材養成講座（博物館などが社会的処方の場となるための理論と実践を学ぶオンライン講座） 3.博物館のリラックス効果に関する実態調査（リンクワーカーがつないだプログラム参加者への生理測定、心理測定による効果評価を定量的・定性的に調査。対象は児童生徒から高齢者まで幅広い世代とする） 4.博物館健康ステーションの開設（地域住民を対象に、全国のリンクワーカーが企画立案する博物館浴プログラムを提供する、ミュージアムカフェを開催し、地域博物館における居場所づくりを進める。合わせて、居場所の効果を定量的・定性的に調査する） 5.海外博物館、美術館などにおける「健康寿命」増進プログラム及びリンクワーカーの実態調査（海外の先進事例を調査し、特に事例の定量的・定性的な評価方法を課題とし、今後の方策を検討する） 6.海外の博物館関係者、リンクワーカーを招聘したオンライン国際シンポジウムの実施（海外事例紹介、及び情報交流の場とする） 7.本事業を紹介する多言語映像資料の制作（海外博物館、美術館などに向け社会資源活用の成果を公開する） 8.3ヵ年の事業成果をまとめた報告資料の作成（「2042年問題」解決に向けた社会資源を活用した「健康寿命」増進プログラム開発とリンクワーカー人材育成事業の総括報告を国内外に公開する） 9.実行委員会の開催（3部会を設ける。①調査研究部会②プログラム開発・評価検討部会③教材開発部会） 【対象】 行政職員、医療・福祉従事者、博物館・図書館関係者、博物館学芸員・図書館司書有資格者（休眠学芸員・休眠司書）、博物館学・図書館学を学ぶ学生、博物館・図書館と健康に関心のある市民、在住外国人など	12,000

令和5年度大学における文化芸術推進事業採択一覧

【 単位：千円 】

	大学名	事業名	事業概要	内示額
13	公立大学法人　広島市立大学	街に介入する芸術、その公共性の議論を促すメディエーター養成プラットフォーム	【概要】 　令和4年度の事業では、芸術による創造都市への介入を開拓する組織「広島芸術都市ハイヴ」Hiroshima Arts＆City Hive（HACH）を立ち上げ、キュレーション力、情報調査力、協業体制構築力向上を目指した3つの活動を行い、広島内のアートマネージメント人材のネットワークを広げることができた。令和5年度は前年度の協業体制を活かしながら、活動を８つに分割・整理して、それぞれの講座を継続・発展させる。 １）アートメディエーター（市民と芸術文化の仲介者）の営みについて語りあうポッドキャスト配信を行うとともに、地域・企業のニーズに応えられる創作者の人材調査・管理法を模索し、 ２）学校教師を対象にした対話型鑑賞講座を通して、多様な市民に向けて美術への窓口を開く。 （アン）モニュメント・プラットフォーム（キュレーション能力、企画・運営力の向上）としては、 ３）地域の商店街や店舗の協力で、写真・手話ダンス・空間デザインを通した芸術的介入をキュレーションする。 ４）さらに企画書作成のワークショップを発展させ、その成果と公募企画を公開講評し、地域で議論する。 カタログHiroshima(1894-2025)　（調査力、発信・アーカイブ能力の向上）としては、 ５）文化芸術情報を発信するウェブ媒体との協働で発信・聞き取りのライター育成講座を行い、 ６）公的に収蔵されない民間の画廊史などに関わる作品や資料のアーカイブ方法を学ぶ。 都市介入ワークショップ（設営実践力、協業体制構築能力）としては、 ７）最新のデジタルアプリを使った地域資源データベース管理術を学び、 ８）設計士の聞き取りをによって街の歴史と未来を考え、都市介入力を高める。 【対象】 　アーティスト、リサーチャー［芸術分野だけでなく、社会科学・人文科学も含む］、批評家・編集者、記者、歴史家、デザイナー、学芸員、図書館司書、アーキビスト、アートマネジメント従事者、学生、作品解説やツアーなど鑑賞者教育を行うメディエーター、文化芸術分野の行政・NPO職員・一般市民、企業の地域支援課職員、中高の教員	17,700
14	公立大学法人大阪　大阪公立大学	Equity（公正）& Justice（正義）を軸としたソーシャルアートコーディネーターの人材育成	【概要】 　本事業は、基礎講座（座学）→ワークショップ→リサーチ→実践→成果発表→アーカイブ・評価というプログラムで、理論から実践、振り返りへという合理的な流れによって組み立てられている。全体で14の活動からなっている。 【基礎講座１】ソーシャルワーク、【基礎講座2】アートマネジメント 【ワークショップ１】反抑圧プラクティス 【リサーチ１】高齢化と孤立の社会で、【リサーチ２】障害者とまちづくり、【リサーチ３】差別のある社会（リサーチは選択制） 【実践・場づくり１】公害から環境共生、【実践・場づくり2】貧困と孤立、【実践・場づくり３】ジェンダー。（実践・場づくりは、受講生の関心・能力を考慮した任意かつ選択制） 【E&J Café】受講者が主体となって討論・情報交換を行うことを目的としたカフェ 【E&J芸術祭】成果発表、【ブックレット制作】、【アーカイブ】、【事業評価】 【対象】 　アートプロジェクト運営にかかわる実務者、ソーシャルワーカー、地域コーディネーター、行政担当者（文化政策、福祉政策）、美術館・ホール・博物館等の学芸員・職員、研究者（大学院生等）、アーティスト、リカレント希望者。いずれも若手あるいはそれぞれの職能の志望者をメインの対象としたい。	18,500
15	国立大学法人　富山大学	『つくり手』『つなぎ手』『つかい手』のクロスオーバーによる複合的なアートマネジメント人材の育成事業	【概要】 　初年度となる令和5年度は、本学芸術文化学部複合領域の教員・学生を中心に、他大学・研究機関、文化施設、行政と連携して、『つくり手』『つなぎ手』双方向からの視点を取り入れたアートマネジメントの特別講座及びリサーチを実施する。 　活動①特別講座「『つくり手』が『つなぎ手』になる」、活動②特別講座「『つなぎ手』が『つくり手』になる」では、美術館・博物館施設の運営を行う特別講師を招聘し、『つくり手』『つなぎ手』双方の役割がどのような関係性で成り立っているのかについて、基調講演・フィールドワーク・ディスカッションを行うことで明らかにする。活動③「国際会議「『つくり手』がつくる新しい美術館ー廃棄施設を活用した文化施設の実験的運用と再生（仮）」」では、公共の廃棄施設を実験の場として、既存のアートワールドが抱えている問題点を克服した、『つくり手』主導でつくる新しい美術館モデルについて、国内外から招聘する専門家と共に考える。ゼロベースで文化施設の運営を行なっていくプロセスを共有しながら、『つくり手』と『つなぎ手』の考えをバランス良く理解し、実践できるアートマネジメント人材の育成に繋げる。 【対象】 　既存のアートの仕組みや役割について問題意識を持つ学生・社会人・アーティスト・キュレーター・研究者・アーキビスト、新しい情報発信プラットフォームを求めている人、マネジメントや経営に興味のあるアート関係者、美術館関係者、行政、報道関係者、ジャーナリスト	10,600

【応募・採択状況】	
応募件数	26件
採択件数	15件
採択率	57.7%
合計	198,400千円

令和５年度
大学における文化芸術推進事業
協力者会議委員一覧

柴辻　純子	音楽評論家
渋谷　拓	金沢美術工芸大学准教授
間瀬　勝一	公益社団法人全国公立文化施設協会アドバイザー
毛利　直子	高松市美術館 主幹兼課長補佐
渡邉 哲意	宝塚大学東京メディア芸術学部教授 学部長

（五十音順・敬称略）